

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害防除技術情報（第 5 号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしく
お願いします。

記

1 情報の内容

施設栽培トマトにおけるトマトキバガによる被害の初確認について

2 対象作物

トマト、ミニトマト

3 発生の経過

本虫は重要病虫害侵入警戒調査において、令和 4 年に松前町のトマト施設周辺に設置したトマトキバガの性フェロモントラップで発生が初確認され（令和 4 年 5 月 20 日付け、病虫害発生予察特殊報第 1 号参照）、これまでに、久万高原町、大洲市、松山市、伊予市でも発生が確認されている。しかし、現在まで本虫による農作物の被害は認められていなかった。

10 月上旬に久万高原町のトマト生産者より、本虫の幼虫による葉の被害と思われる症状が見られたと連絡があったため、寄生葉を採取し羽化させて確認したところトマトキバガであった。

4 被害・発生状況

トマトの葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表皮のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真 1）。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数 mm 程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下するとされるが、現在のところ確認されていない。

現地での発生量は少なく、寄生株率 13% で、1 株に 1～2 か所程度の被害葉が見られた。

5 本種の特徴

(1) 形態

成虫は翅を閉じた静止時（写真 2）で体長 5～7 mm。前翅は灰褐色で黒色斑が散在する。後翅は一樣に淡黒褐色である。幼虫は終齢で約 8 mm に達する。体色は淡緑色～淡赤白色で、前胸の背面後縁に狭い黒色横帯を有する（写真 3）。

(2) 生態

1 年に複数回の世代が発生し、繁殖力が高い。発生世代数は環境条件によって異なり、南米では年に 10～12 世代発生することが報告されている。卵～成虫になるまでの期間は 24～38 日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。また、発育下限温度は 8℃とされている。

成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。雌は一生のうち平均約 260 個の卵を寄生植物の葉の裏面などに産み付ける。幼虫は 1 齢～4 齢までの生育

ステージがあり、土中や葉の表面で蛹化（写真4）する。

6 防除対策

- (1) 圃場をよく見回り、見つけ次第捕殺もしくは被害葉を処分する。
- (2) 被害葉や被害果実は圃場内に放置せず、土中に埋めるなど適切に処分する。
- (3) 発生圃場では発生を拡大させないため、薬剤散布を行う。散布に当たっては薬剤抵抗性を発達させないため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行う。



写真1 被害葉



写真2 成虫



写真3 幼虫



写真4 蛹

表 トマトキバガに対する防除薬剤

農薬の名称	作物名称		使用方法	希釈倍数 使用量	使用時期	本剤の 使用回数	IRACコード*
	トマト	ミニトマト					
ダブルシューターSE	○	○	散布	1000倍	収穫前日まで	2回以内	5
ディアナSC	○	○	散布	2500～5000倍	収穫前日まで	2回以内	5
アフーム乳剤	○	○	散布	2000倍	収穫前日まで	5回以内	6
アグリメック	○	○	散布	500～1000倍	収穫前日まで	3回以内	6
コテツフロアブル	○	○	散布	2000倍	収穫前日まで	3回以内	13
トルネードエースDF	○	○	散布	2000倍	収穫前日まで	2回以内	22A
フェニックス顆粒水和剤	○	○	散布	2000倍	収穫前日まで	2回以内	28
ベリマークSC	○	○	灌注	400株当り25ml	育苗期後半～定植当日	} 1回	28
プリロッソ粒剤	○	○	株元散布	2g/株	育苗期後半～定植時		
プリロッソ粒剤オメガ	○	○	株元散布	2g/株	育苗期後半～定植時		
ベネビアOD	○	○	散布	2000倍	収穫前日まで	3回以内	28
ヨーバルフロアブル	○	○	散布	2500倍	収穫前日まで	3回以内	28
グレーシア乳剤	○	○	散布	2000倍	収穫前日まで	2回以内	30
プレオフロアブル	○	○	散布	1000倍	収穫前日まで	2回以内	UN

※ベリマークSC、プリロッソ粒剤、プリロッソ粒剤オメガ、ベネビアODは同一成分のため、使用回数に留意する。